九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

テキストのエアポケット：『目覚め』の「死ぬまで泳ぐ」という結末部をめぐって

原口，遼
九州大学：教授

https://doi.org/10.15017/6788177

出版情報：九大英文学. 37, pp.127-138, 1994-12-19. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

テキストのエアポケット——『目覚め』の「死ぬまで泳ぐ」という結末部をめぐって

原口　遼

小論は作家論を目指したものでもなければ、小説論を目指したものでもない。そうではなく、『目覚め』の結末部の、さらに言えばエドナの最後の死に方について吹っ切れない感覚が残るので、その事について書くのである。『目覚め』の結末部は問題を孕んでいて、諸批評家の甲論乙駁の大きな原因になっている。確かにその小説の終え方には問題があって曖昧であるが、私にはこのことは元来が虚構であるところの小説には常々付随する問題であるように思えて、それは小説の真実性(リアリティ)の問題と裏腹になっているからには、小説を考える人達の一つの考えるヒントになればと思って書き記すのである。

さて『目覚め』は全39章から成っているが、[1] その最終章に至って、女主人公の Edna Pontellier はニューオリンズ市の南方50マイルにある Grand Isle 島に一人で渡って行き、早春の風に吹かれつつ、衣類はもとより着ていた水着をも脱ぎ捨て、いわば Manet の「草上の食事」風に全裸となり、海へとはいり、沖合いへと泳ぎ出し、最後力尽きて溺死する。そして小説はまさに溺死せんとする彼女の最後の姿を以て閉じられる。エドナの自殺は、スタイルがよく色白の若妻(29歳)が、回りに人影が見えないとは言え、海浜で全裸になって、それを爽快だと感じつつ、その上で海の中に泳いで行って死ぬというのであるから、後期印象派の絵画風に impressive でもあるが、本小説が発表された時代的背景(前世紀末の1899年)からして、また極めてセンセーショナルであった事であろう。今日でもそのイメージの鮮烈さ、みずみずしさは全く古びていない。そして本書を閉じた私たちは、自殺事件に遭遇したときによくあるように、なぜ主人公は自殺したのか、その間に一体何があったのかといった関心から、テキストを改めて丁寧に読み返したいとする衝動を持

たせられる。

諸家の『目覚め』についての批評を閲読すると、この結末の自殺を手がかりにして、自殺の動機論や女主人公の人格論、さらには作品の構造論等が展開されており、それらはそれらなりに興味深い。例えばその中の一つ二つを上げると、

①エドナの死は解放であり、勝利であったとする意見がある。[2]

②エドナの死は、結局は敗北だったとする意見もある。[3]

③上の2つの見解の折衷案として、エドナの死は勝利とも敗北とも言えず、小説全体を調べてみれば、小説は死の旋律と生の旋律がより合わさっており、エドナの最後の死は、この二つの旋律の昂揚したところに起こっているとする意見もある。[4]

④作品の主要なイメージに着目し、かつエドナのロマンティックで自己愛的な側面に着目して、エドナはイカロスではなくてナルシサスみたいなものだったとする意見がある。[5]

⑤さらにそれをフェミニズムの立場から一歩押し進めて、エドナはアフロディティーの再現である、とする意見もある。[6]

そのような種々様々の意見は、無論論者の立場を反映しているが、私自身も、自殺への道行きを再点検し、自殺の理由およびその意味合いを考え、一本の論文に纏めてみたことがある。[7] 私はエドナの内面についてあちこちに散見している Narrator の説明を手がかりにして総合的に考えた結果、その自殺は社会的にも家庭的にも、女性の自立と言う点からも、様々な意味合いを持たせられた、必然的な帰結だったとして結論づけた。私の読み方によると、彼女の生育歴から見て、彼女の行動は19世紀末(小説の時代背景は1890年頃)の父親や夫を中心とする父権的な家族制度の抑圧装置への反抗と、それからの解放を求めての逃走と言う意味があるが、決して積極的、建設的かつ前向きのものではなく、最後の自殺もそうした彼女の反抗と逃走を基本的軸とする行動様式の延長線上にあって、それまでの行動様式と矛盾するものではなく、突発的なものではない、と言った論旨であった。

だが今回、小論では、そうした全体的作品論は目指していない。ただ、エドナの死に方(自殺の方法)には、やっぱり腑に落ちないことがあって、その

事を一応考慮しないと、彼女の死(引いてはそれまでの生き方)が漠然として扱われることで、彼女の自殺の性格づけ自体が曖昧として来て、エドナの悲劇が不必要に複雑なものとして解釈されかねないので、この際、その点に注意を向けたいのである。

それは特に結末部のエドナの死の場面であるが、果たして人は沖合いにまで泳いで行って自殺するだろうか、或いはそうしたことが可能なのだろうかという疑問である。或いは人は言うかも知れない。それは小説の中にそのように書いてあるのだから、それで(自殺したで)いいのではないかと。それよりも、なぜエドナがそうした自殺に追いつめられたかについて、当時の社会慣習の中でいかに女性達が虐げられていたか、結婚しても男性の所有物のように考えられていて、個人として法律的人格を認められず、経済的な基盤を持てる機会も少なかったか等について考えて見ましょうよと。

或いは、ショパンは、当時の過度にピューリタン的なタブー意識と偽善性に反抗して、女性達のリアルな性感覚 (Sexuality) と言うものを思い切って描いているので、時代の制約を越えたその先駆性に着目してみましょうよ、と。

あるいは、衝動的で奔放なエドナも、夫の支配に反抗したり、思わず姦通したりなどはしては見たけれど、結局は、女友達のピアニストの Reisz 老嬢が警告したように、社会体制、慣習に打ち勝つだけの強い翼を持たなかったために、結局、飛翔ならぬ溺死をする事で終わってしまったという寓意があって、この悲劇的結末は当時置かれていた女性達の精神的境位を表わしているのだから、その方面のことを考えてみましょうよ等々。

それらは一々ごもっともで、本小説にはそうしたごもっともな側面が多々見つかるために問題作となっているわけであるが、私が今ここで指摘したいのは、小さいけれども、その先にあるものであって、それは最後の死に方である。

今、そこの部分に注意を向けてみよう。

本小説は無駄のない簡潔な文体で間然することなくエドナの Action や心理が描かれているが、最終章も流麗そのものの文体で描かれている。そこでは忽然としてグランド・アイル島に現われたエドナは、近づく夏に向けてバン

ガローを修理しているRobertの弟のVictorとその恋人のMariequitaに、食事を作っておいてなどと言い残して、ひとりで海辺へと歩いて行く。そしてバス・ハウスにあった昨夏の水着を一度は身体に通すが、波打ち際でその水着も脱ぎ捨て、全裸となり、沖へと泳ぎだすのである。ここ辺から最後に溺れ死ぬまでのシーンは、ニュアンスが重要なのでその全部を引用してもいいぐらいだが、ここでは最重要箇所のみを引用しておく。

色あせた去年の水着が、そのままの場所に掛かっていた。

エドナは水着に着替え、脱いだ服をバス・ハウスの中においた。一人切りで波打ち際まで来た時、エドナはその着心地の悪い水着を脱ぎ捨てた。生まれて初めて、彼女は外気に、陽光の慈しみに、微風のたわむれに、裸身を晒して立った。海の波が彼女を誘う。

大空の下に裸身で立つ、何と厳かで不思議な感じだろう！　何と甘く美しいことだろう！　生まれたばかりの生き物、この世界に、今初めて眼を開こうとしている生命のようにもエドナは自分を感じていた。(113)

このようにエドナは、陽光と微風の中の自分の裸身を、爽快そのものに(「甘く美しく」"delicious")感じていることが分かる。この事は、夫から着せかけられ経済的・心理的な負担とみなされる衣服を脱ぎ捨てた解放感、およびそれまで抑圧されて来た自分の肉体的・精神的拘束を、すべて投げ捨てたところより生ずる解放感が現わされていると解釈できる。

その後、エドナは泡立つ波が足先にまつわりつくのを感じ、水の中に入って行き、そしてゆっくりと水を切って泳ぎ始める。この辺は簡潔にして全く無駄のない文体である。

泡立つ波が彼女の白い足先にまつわり、くるぶしの上まで蛇のように巻き上げてくる。彼女は水に入っていた。水は冷たかった。だが、彼女は進んでいった。水が深くなった。白い躰を浮かせて、彼女はゆっくりと水を切って泳ぎはじめた。海は官能的で、柔らかく、やさしく、彼女の躰を抱擁した。(113)

エドナは泳ぎ続けた。去年の夏の夜の記憶が浮かんだ。あの時は、遠くまで泳ぎすぎて、岸へ帰りつけないのではないかと怖かった。今度は後を振り返らないで、彼女は泳ぎ続けた。(113)

「去年の夏の夜の記憶」とは、ちょうど泳ぎを覚え始めた去年の夏の夜、誰も行けないぐらい遠くまで行けるかもと思って沖合いに出すぎて、急に死の恐怖に怯えて大慌てで必死で戻ったその時の恐怖心を指している(29頁付近)。即ち、溺れかかった者の、死への本能的な恐怖心である。しかし今回、彼女は泳ぎ続けて行く。

腕も脚も疲れてきた。…
疲労が強い、負けそうだ。…
…浜はもう、余りに遠い。エドナの力は尽きようとしていた。(114)

そして小説は次のような一節で終わるのである。

遥かな浜を見た、一瞬去年の恐怖がよみがえった。しかし、それも束の間のことだった。父の声を、姉のマーガレットの声を聴いた。鈴懸の木に繋がれた老犬の吠え声を聴いた。ポーチの上を歩く、騎兵将校の拍車の音を聴いた。蜂の唸り声があって、麝香に似たせきちくの香りが辺り一面に漂っていた。(114)

つまり、彼女の死に方は、去年の夏、覚えたばかりの水泳術によって沖合いにまで(自力で)泳いで行き、その結果、もう陸地に戻れないような地点まで到達し、疲れ果てて、首尾よく(?)目的の溺死を果たすと言う形を取っている。その際、彼女には、昨年の夏に感じたような(溺れかかる者の)死への恐怖も頭をかすめたが、それもある意味では乗り越え、先へ先へと泳いで行き、ついにはそうした恐怖心さへ薄れて、最後気を失うと言うわけである。

しかも、最後に失神して行く場面では、周辺に蜂の唸り声がして「麝香に似たせきちくの香りが漂っていた」(114)(小説の最後の一文。原文は次の通

り。"There was the hum of bees, and the musky odor of pinks filled the air.")というわけだから、エドナはせきちくのかぐわしい匂いのなかで、涅槃状態に入ったと言う事になっている。そこでは、勿論、死後の人間の肉体の硬直や、水膨れや、腐乱や、裸体での無様な姿での発見などといったところまでは、描写は進められてはおらず、涅槃に入った形で、エドナは永遠の今を漂って行くような感じの描かれ方をしているのである。[8]

この最後の自殺は、エドナの姦通の社会的清算でもあり、孤独感から来る絶望や、現実生活のルーティンに飽んだ事から来る結果でもあるのだが、その終わり方は、作者によってなにやらはなむけ的な描写をされていて、いかにも清澄に描かれている。この場面の、若い女性が裸体になって海に入るといった意表を衝く奇抜さ、絵画的な美しさは印象的であって、それだけでもこの小説のすごさを表わしているが、さらにはエドナがカトリック教徒であるクレオールの男性と結婚していることから考えると、カトリック教にとって、自殺と姦通とは最も禁じられたタブーであるから、エドナの入水は、一方で逃避的な性格を持ってはいるが、同時に極めてラジカルな反抗・反乱であり、一般読者のみならず、特にカトリック者のセンシビリティを大いに逆撫でする事だったに違いない。

エドナが(ドライサーの "The Lost Phoebe" の老ヘンリーのように断崖に臨んでそこから身を投げるのでなく)、自らが習得した自分の肉体的な能力を表わす泳力でもって力の限り沖へと泳いで行って、そして死ぬといったそのジェスチャーには、彼女の意志と主体とまた反抗が表わされていて、それは彼女のそれまでの生き方、行動様式と完全に軌を一にしていて、矛盾はない。従って、こうしたエドナの意志的なジェスチャーと作者の共感的な描写によって、この最後の死に方をエドナの勝利だと捉える批評家達がいても、少しも不思議ではない。またそれを一歩踏み出して、それはエドナの神話の女性アフロディティーへの変身を示すなどといった、彼女の自殺への賛歌のような論調の意見があってもおかしくはない。それは、一に先述したエドナの主体的、努力的、意志的な、泳いで行って、いわば幸福な死を達成するという形態によって支えられる批評なのである。

しかし、エドナの自殺は、また他方では彼女のおかれた事態を何ら解決し

てはいないわけで、その観点から見ると、彼女の入水自殺は、状況からの逃避・逃走という彼女の一貫した行動様式の延長線上にあるからには、それは敗北であることも確かなのだから、この自殺を否定的に捉える批評家がいるのもこれまた不思議ではない。そうしたことから、私はエドナの生き方および死に方を再度辿り直してみて、総合的に考え、彼女の行動様式と思考様式のパターンを炙り出してみたのである。[9]

さて、私のここでの疑問は、エドナは死に臨んで、本当に死の恐怖を乗り越えたのか、果たしてそれを乗り越えるぐらいの、即ち、そうする事で目的を完遂するぐらいの意志堅固なところがあったのかどうかということである。そして、私はそれはやはりなかったと判断するので、このエドナの自殺そのものを不可能かつ不自然な行動として考え、その事を指摘しておきたいと思うわけである。

先回りして結論から言っておくと、エドナはこうした形態での意志的な自殺の敢行は無理である女なのだ。彼女の全般的な行為の形態は、衝動的、快楽追求的、逃避的ではあっても、何かを完遂するほどの持続的、思考的、変革的なものではなく、またエドナは断固として何かを実行するに必須の強固なる論理性をも持っていないからである。[10]

その様な女性でも、絶望からにせよ反抗からにせよ、断崖等から投身するというぐらいの事なら理解できる。しかし、意志的な泳ぎと言う行為を通して死んでみせる、即ち死ぬまで泳いでみせるということは、特に彼女の行動様式からしてどうしても無理なのだ。私達は逆にこのような特異な自殺の決行方法から、彼女のこれまでの行動様式を再点検するわけだが、そのような再点検からしても、28歳の、肉体的には健康そのもので、食欲旺盛にして、食後は自然に眠くなり、好奇心一杯で、恋のアバンチュールにも感度よく応える肉体を持ち、喜怒哀楽の感情も極く正常なる女が、泳いで行って死ぬ、しかも死の恐怖を乗り越えてまで泳ぎ続けて行って溺れると言った形態を、極めて不自然だと取るのである。

それかあらぬか、彼女の死に方は最終的には意志的なものではなく、むしろ意志も何もかも衰弱して行くような形で、失神して行くような描写になっている。

腕も脚も疲れて来た…
疲労が強い負けそうだ…
…浜はもう余りに遠い。エドナの力は尽きようとしていた。(114)

死の恐怖心が起こるには、生に対する執着心と同時に意識の健常さが残っていることが必須だが、この時点でエドナはただひたすら衰弱するまで泳いで行く、あるいは泳いで行って衰弱するという形になっていて、死の恐怖などには捕らえられなかったかのような描写がされている。ましてや、人が現実に溺死する場合の、水を呑み込むこと、水がのどや胃でなく、気管や肺に入って行くこと、むせび苦しむこと、さらには死から免れようとする本能的動作などには言及されない。つまり、この死に方は極めて観念的な死に方、哲学的な死に方であって、現実的、物理的、生理的な死に方ではないと言うことが分かる。

このような形で、作者はエドナを死なした。エドナが泳いで行って死に臨みつつ、幾つかの自問自答をしたり、また周囲の者たちへ恨みつらみをぶつけたりする事に、彼女の基本的な欲求と不満は明らかにされていて、そこから、エドナの死の原因の意味合いは想像されるのだが、しかしそれは、いわば肉体のないところから発せられる思念的な不平不満と苦しみなのだ。

これまでのエドナの性格、感情、行動様式の検討から分かるように、この自殺の形態そのものが、彼女の生き方から正当化されるような種類のものでなく、そもそも不可能な種類のそれであったとすれば、やはり、彼女の自殺は勝利などではないと見なされるべきであろう。ましてや、彼女が海から生まれ変わったヴィーナス、あるいは、アフロディティーだという考えは、確かに、その様な面はあるにしても——最後の麝香のような香りに包まれたエドナを思え——それは、エドナの自殺の一面を誇大に捉え、拡大化した解釈と言わざるを得ない。[11]

私などには、エドナが海浜へ行き、爽快そうに入水する姿には、一泳ぎして、頭を冷やして岸に戻り、そしてそれからの後半生を、文字どおり裸一貫からやり直そうとするための、一つの通過儀礼のように感じられるほどだ。

しかし、実際にはエドナは町の評判の良くない男と姦通したわけだし、年下のロバートを誘惑したりもしている。夫がニューヨークの出張から戻ると、それらのダブル姦通に対する解決を見いださなくてはならない。子供達への配慮もある。ということで、当時の19世紀末の、しかも離婚がほとんど認められていなかったカトリックの世界では、恐らく事態は深刻で、[12] 何らかの形での清算的決着は計られなくてはならなかっただろう事は確かであるが。

その解決はそれから100年たった現代アメリカでは、余りにも容易である。それは身の上相談のコラムニスト Ann Landers 小母さんに尋ねるまでもなく、夫婦は綺麗さっぱりと離婚して、子供の親権者を取り決め、そして新しい男と再婚して、他の都市、例えばニューヨークなりシカゴなりに行ってしまえば、それで新生活は容易に始められるというわけだ。

恐らく一つの解決法としては、エドナは年下の恋人ロバートとそのようにして、現在の邸宅もあり下女もいるといった生活よりは慎しいが、しかし心の満足の行く生活をスタートさせることはできたわけだ。しかしそのような合理的で実際的な解決は、当時のニューオリンズでは不可能だった。だからエドナはロバートからも理解されえず、絶望して自殺を決断した。しかし、私が再三言っているように、泳いでの自殺は、彼女の反抗と逃避のパターンの延長線上にはあるが、しかしむら気で、持続的なねばり強い性格を持たず、また目的完遂型でない彼女にとって、そのような自殺は理想や願望ではあっても、実際上は不可能だったはずなのだ。

つまり、そこには私達読者のリアリティの感覚からして、大きな嘘がある。しかしその嘘がなければ、エドナの事件には決着がつけられないし、作品そのものが成立しない。そうした意味でこうした嘘(＝虚構性)は文学作品には、時に essential な種類のものである。だがそれだからと言って、読者はそうした嘘をも全く疑うことなく鵜呑みにして、作品全体をすべて整合的に説明し、納得する必要もないであろう。

文学作品にはある意味では、このような種類の大きな嘘が一つ二つは device としてあり、その嘘を基盤にして作品が成り立っている場合すら多々ある。その嘘は見抜かなくてはならぬ。しかしそれを大真面目に厳密に追求すると、無意味で滑稽なものになる。その様な種類の嘘は文学作品には数多く、往々

にしてそうした嘘の約束事の上に文学作品は成立している。しかしその嘘を緩やかに受け入れる事で、作品の豊穣さや面白さを味わうことができるのなら、それが元来が虚構たる文学作品を読むための賢明なる読者の方法であるのだろう。[13]

かくして、文学作品を味わうことは、畢竟するに想像力の中での一つの遊びなのだが、また文学作品は世界の構造や、世態人情、人生の機微、自然の理解 etc. について多々教えてくれる。またイメジャリーや象徴や隠喩や提喩等に関して、そうしたもののダイナミズムや微妙さを教えてくれる。そういう意味では、文学作品を読み味わう事は遊びだが、また真剣に取り組む価値があるものなのだ。

エドナの自殺の吹っ切れなさから、以上のようなことを考えてみた。ひょっとしたら私の独り相撲だったのかも知れないが、文学作品を愛好する人達にとって、何らかのヒントになれば幸いである。(1994年9月1日、熱暑と渇水の福岡にて)

註

1 Kate Chopin, *The Awakening,* ed. Margaret Culley (Norton, 1976) を底本とした。以下本書よりの引用頁は本文中の括弧中に記す。杉崎和子訳『めざめ』牧神社1977年を字句を少し修正して利用させて貰った。記して謝意を表する。

2 Per Seyersted, *Kate Chopin : A Critical Biography* (Baton Rouge : Louisiana State U. Press, 1969), 149.

3 George Spangler, "Kate Chopin's *The Awakening* : A Partial Dissent," *Novel*, III (Spring 1970), 254-255.

4 Takashi Sasaki, "Challenge to the Taboos : A Study on the Ending of *The Awakening* (Originally in Japanese), " *Studies in American Literature,* No. 17 (American Literature Society of Japan, 1980), 74-86.

5 Margaret Mitsutani, "Kate Chopin's *The Awakening :* The Narcissism of Edna Pontellier," *Studies in English Literature,* English Number, 1986 (The English Literary Society of Japan, 1986), 3-15.

6 Sandra Gilbert, "The Second Coming of Aphrodite. "*Kate Chopin,* ed. Harold Bloom

(New York : Chelsea House, 1987), 89-113.

7 Ryo Haraguchi, "Revolt and Escape in *The Awakening,* " *Kyushu American Literature,* No. 35 (Fukuoka : Kyushu American Literture Society, 1994), 1-10.

8 自殺者を扱った N. Hawthorne, *The Blithedale Romance* (1852) では、川に投身した活動家の女性 Zenobia の死体は、捜索の途中小舟の上から竿で突き刺され、さらには引き上げられ、木の根元で月光の下、硬直した姿を晒されるといった処遇をされる。勿論作者ホーソンは、ゼノビアに対して非好意的である。

Jack London の自伝的小説 *Martin Eden* (1909) では、主人公のマーティンは功利主義的な薄っぺらな恋人に失望し、世の中に絶望し海中に投身するが、最後は主人公の恨みを表わすように、ぶくぶくと泡を吹きながら失神する。

Dreiser の "Lost Phoebe" (1918) では、老妻を失った老いた夫は生きる支えを失い、頭が少しおかしくなり、月光の中、幻影の妻を捜し歩いて、崖の上から墜落死して、翌朝見つけられる。

Faulkner の *The Sound and the Fury* (1929) では、没落南部貴族の夢を背負わされたハーバード大生の主人公は、旧家再興の力無く、自虐的に自分と一家の無力感にひたりつつ、一日中ケンブリッジの内外を茫然として歩き回り、夜になって川に投身する。

従って、エドナのように爽快そうに、解放感に浸って、勇ましそうに、死に向かって突進していくタイプの自殺者はやはり特異である。

9 Ryo Haraguchi, *op. cit.*

10例えば、エドナは夫の留守中に一念発起して、自己信頼と自己発展を称揚したエマスンを読もうとするが、いつの間にか睡魔に襲われている(73頁)。このことを George Arms は次のように指摘している。"To grow sleepy over a Transcendental individualist also hints that Edna's individualism lacks philosophical grounding." *Cf* George Arms, "Contrasting Forces in the Novel, " Kate Chopin, *The Awakening,* ed. Margaret Culley (Norton, 1978), 177.

11ここで「鈴懸の木につながれた老犬」のシンボリズムについて一考しておく。小説の最後にエドナの薄れる意識を横切ったのは、ポーチを歩く騎馬将校の拍車の音と、木に繋がれた老犬の吠え声であった。「拍車の音」と「繋がれた老犬」が何を意味するかを考えると、「拍車の音」はエドナの骨がらみになったロマンス(恋愛)への欲求を示しているし、「繋がれた老犬」は老いてもなお、家というものに繋がれ続けるエドナ自身の絶望的状況を示していると考えられる。かくして最後の最後まで、エドナの欲求は決して満たされない種類のものである故、私達はエドナの最後の死も否定的に捉えざるを得ない。

12当時のルイジアナでは10万人に対してたった29件(!)の離婚が認められたと言う報告がある。*Cf*. Margaret Culley, "The Context of *The Awakening*. " *The Awakening,* ed.

Margaret Culley (New York : Norton, 1978), 118.

13一つの嘘に関して。例えば *The Great Gatsby* (1925) の Gatsby の金作りについて。酒の密売や何かのギャンブルなどで大金をもうけた、という風に取りざたされるが、そうした巨万の富をギャッビーがどのようにして手にいれたかはあくまで不明で、ある意味では文学的虚構である。私などには、それは、ギャッビーの分身たる作者 Fitzgerald が印税で一儲けした金と取れば、最も簡単で、ギャッビーを取り巻くお祭騒ぎ的パーティーも、寵児として一時的に衆目を集める事も、その後の凋落も、フィッツジェラルドの作家としての人気の上昇と下降、得意と失意とを反映しているのだと見て取れて、簡単に仕掛けが分かるのだが、小説中、ギャツビーはあくまで神秘的な才と秘密のコネクションで金を作ったとされている。そしてそれは追求することの不可能な謎でもあり、また虚構でもあるのだ。